

# 古代の川部について

前之園 亮 一

はじめに

我が国は大河こそ少ないものの、河川が毛細血管のように国土のなかを隈なく流れ、日本の山と海は川によってつながっている。

河川の重要性はいまさら言うまでもないことであるが、古代の川部（河部）に関してはあまり注目されることはない。しかし、川部は山部・海部にとらず重要な部であると考ええる。それで筆者は、かつて平成十年に「刑部の職掌・起源と宋人部・猪使部・河部について」と題する拙稿において川部について部分的に論じたことがあった。あれから十三年もたつて、やっと川部に関して少し考えがまとまったようなので、ここに再び川部について述べてみることにしたい。

また、川部は允恭天皇の時代に設定されたと伝えるが、允恭天皇とその時代もあまり注目されることがない。小稿では五世紀中葉の允恭朝が歴史的に重要な時代であったことも指摘した。

なお、本論にはいる前にカハベの表記・用字について一言ことわっておきたい。『古事記』は河部や神沼河耳命（綏靖天皇）をは

じめカハにもつばら河字を用いており、カハベも河部と表記している。その理由は、川字は山字や小字に誤写されやすいので、カハベも山部に誤写されないようにことさら河部と表記したのである。しかし、古代の人名におけるカハベの通用的な表記は川部であるから、小稿ではもつばら川部と表記することにする。

## 一 川部の設定記事

川部を設定した記事は、『古事記』允恭天皇段に次のように記されている。

木梨輕太子の御名代として、輕部を定め、太后の御名代として、刑部を定め、太后の弟田井中比売の御名代として、河部を定めたまひき。

一方、『日本書紀』には田井中比売の名代として河部を定めた記事はなく、かわりに『古事記』に見えない藤原部設定の記事が允恭天皇十一年条に載せられている。

田井中比売が允恭天皇の妃となったことはどこにも記されていない

いにかかわらず、彼女のために川部を設定したことがわざわざ記されているのはなぜだろうか。その理由は、田井中比売が允恭天皇の妃であったからであり、その名代として実際に川部を定めたからであろう。

しかし、そうだとしても田井中比売と川部との間には名称上のつながりも共通性もなく、依然として釈然としないものが残るのである。本居宣長も「おほかた御名代は、其御名に負はせる地ノ名を取れる例なるに、此レ（川部）は地ノ名なるべくもおぼえず、凡て御名に由縁あるべきこともおぼえず」といって、首をかしげている（括弧は筆者の注）。

田井中比売の名前は、河内国志紀郡田井郷にちなむものである。そうであるなら田井中比売の名代は田井部という名称で呼ばれてよいはずなのに、なぜ川部と呼ばれたのであろうか。

推測するに、その理由は二つあると思う。一つの理由は、田井中比売自身も父の若野毛二俣王（稚野毛二派皇子）も曾祖父の河派仲彦（昨俣長日子王）も川の近くに居住して川とのつながりが深く、田井中比売の家系は河川を生業の場とする首長や民を支配していたからであろう。もう一つの理由は、田井中比売の家政機関に奉仕した人々や経済基盤になる人々の多くが河川の首長や人民によって構成されていたからであろう。

そこで、次に章を改めて二つの理由について述べてみる。

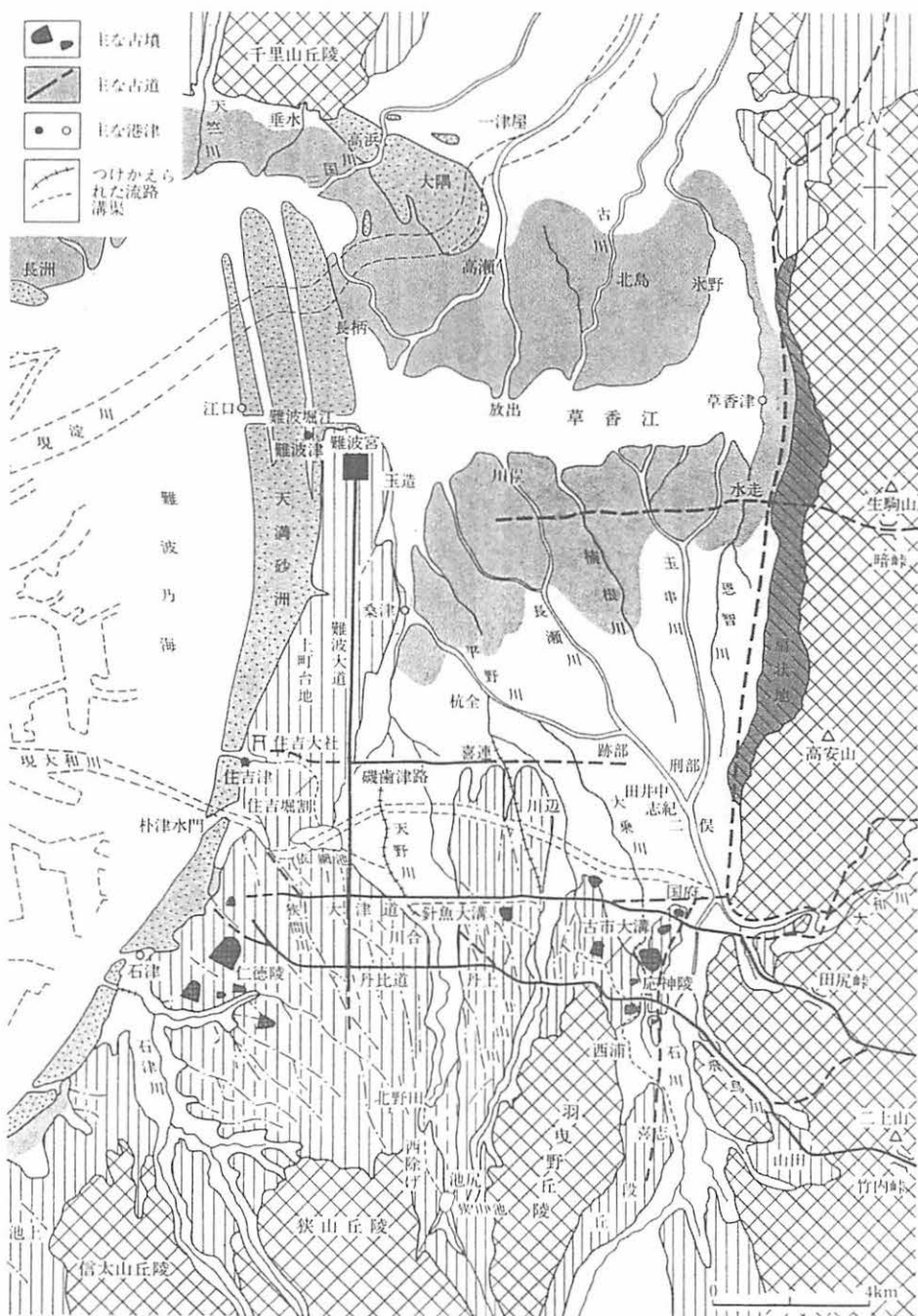
## 二 田井中比売と大和川

田井中比売の田井は、『倭名類聚抄』の河内国志紀郡田井郷の地名と思われる。田井郷は大阪府八尾市田井中に遺称地をとどめており、田井中比売はこのあたりに居住していたか、領地を有していたのであろう。というのは、田井郷の近辺に田井中比売の父や姉、曾祖父にゆかりの地名が存在するからである。なお、田井郷は大和川水運に従事した阿刀氏の本拠地渋川郡跡部郷のすぐ近く（南東約一・二キロメートル）にあることも注目される。

田井郷の遺称地田井中の南東約一・五キロメートルに八尾市二俣が存する。この二俣は、通説では田井中比売の父若野毛二俣王（応神天皇の皇子）の居住していた所と考えられている。若野毛二俣王の存在を証明することは容易でないものの、八尾市二俣は次ページの地図のように古代の大和川本流が二つに分岐する所であった。分岐点ゆえに二俣と呼ばれたのである<sup>3</sup>。

現在の大和川の流路は、宝永元年（一七〇四）の付替工事によって堺市の北辺で大阪湾に注ぐようになったが、古代の流路は大阪府柏原市から生駒山地の西麓を北流しつつ幾筋もの流れとなって草香江に流入していた。その古代の大和川が柏原市高井田を経て同市法善寺町のあたりを通るときに二流にわかれ、一流は西北に向かって現在の長瀬川（本流）となり、もう一流は東北に向かって玉串川（分流）となる。この分岐点辺りの地名が二俣である。なお、小稿では古代の大和川を古大和川と呼ぶこととする。

つまり若野毛二俣王は、古大和川の分岐点の近くの八尾市二俣に居住しており、それゆえに二俣王と呼ばれたのであるが、その娘田井中比売の住む田井郷（八尾市田井中付近）とは古大和川本流の長



### 6－7世紀ころの摂津・河内・和泉の景観

日下雅義『古代景観の復原』の原図に、二俣・志紀・田井中・刑部・跡部・杭全を追加した。

瀬川によって連結されていた。

河川が二つに分岐する所や二つの川が合流する場所は魚類も集まりやすく、よい漁場になったのではなからうか。そのような所は、おのずと川の民も集まってきて不思議ではない。つまり若野毛二俣王の居住する二俣の地は、古大和川の漁場であり、川の民の集まる所であつたと推察されるのである。

田井中の北東約二キロメートル、二俣の北約二・五キロメートルに八尾市刑部がある。ここは河内国若江郡刑部郷の推定地であり、若野毛二俣王の娘で田井中比売の同母姉忍坂大中姫の名代刑部が設置された所であつた。八尾市田井中と刑部は長瀬川の西岸と東岸に位置しているので、かつて田井郷と刑部郷は古大和川本流（長瀬川）をはさんで隣接していたのかもしれない。

なお、若江郡刑部郷の刑部集団の多くは、もともとこの近辺にいた古大和川の川の民であり、彼らを刑部に設定・編成したものである。というのは、後述のように刑部は入れ墨をした猪養など山野河川の民やその長を名代に編成したものであつたからである。

このように、田井郷の近隣に若野毛二俣王の居住地二俣や忍坂大中姫ゆかりの刑部郷が存在することから推して、田井中比売の名前は志紀郡田井郷にちなむものであり、彼女の宮殿は田井郷にあつたと考えられる。

つぎに田井中比売の曾祖父で若野毛二俣王の祖父にあたる河派仲彦も田井郷からさほど遠くない所に居住していること、この三人の居住地も古大和川によって連絡されていたことについて述べる。ただし、河派仲彦の実在を証明することは容易でない。

田井中比売の曾祖父は「日本書紀」応神天皇二年三月条に河派仲彦と表記されているものの、「古事記」景行天皇段に杵俣長日子王、応神天皇段に昨俣長日子王、「釈日本紀」所引「上宮記」一云に淫俣那加都比古とあり、表記と読み方に問題を含んでいる。河俣、昨（杵）俣いずれの表記が正しいのか、また淫俣は何と読むのであろうか。

昨（杵）俣が正しいのなら、摂津国住吉郡に杭全郷（『和名類聚抄』と杭全神社（『神名式』）があるので、この地にゆかりの人物と推定される。杭全郷は大阪市東住吉区杭全一帯に比定でき、八尾市田井中の北東約五キロメートルに位置する。田井中と杭全との距離は近いとも遠いともいいがたいが、両者は古大和川の支流（平野川）によって結ばれていた（前ページの地図参照）。

一方、河派が妥当な表記・読み方であるとする見解も存する。熊弘道氏は「クヒマタとカハマタの問題には依然として問題が残る」としながらも、「記の『クヒマタ』より紀の『カハマタ』の方が原形ではないかと思われ」「カハマタは恐らく河内の地名」とすべきであろうといわれる<sup>4</sup>。

「河内の地名」カハマタは、若江郡川俣郷（『和名類聚抄』）のことはあるまいか。川俣郷は東大阪市の川俣・御厨・新家・荒本・長田・西堤・高井田・森河内・稲田あたりに比定され、古大和川の右岸に位置している。川俣郷推定地は田井中から北へ約七キロメートル離れているものの、両者は古大和川の本流の長瀬川によって結ばれている。

川俣郷は、その名から推して古大和川が分岐していたのであろ

う。しかも川俣郷は、古大和川が草香江という広大な入江に注ぐ所でもあった。したがって、こゝも魚類が豊富で川の民が集まる場所であつたに違ひない。だからこそ後に鎌倉時代から戦国時代にかけ河俣御厨（東大阪市御厨付近）が置かれたのである。

また、「河内国人」で天平十九年九月に銭一千貫を大仏知識に獻じて大初位下より外従五位下に叙せられた河俣連人麻呂（『続日本紀』は二俣郷の人物と推測されるが、彼の巨大な富は古大和川と草香江の漁業によって蓄積されたものではあるまいか<sup>6</sup>）。

田井中比売と忍坂大中姫の生母は百師木伊呂弁という。彼女の名前に含まれた師木が河内国志紀郡のことだとすると、この女性も田井中比売の近所ないし同所に居住していた可能性がある。田井郷は志紀郡に属しているからである。

しかし、百師木伊呂弁の師木は大和の磯城（城上郡・城下郡）のことかもしれない。というのは、允恭天皇二年二月条に忍坂大中姫が允恭の皇后となる以前に、「母に随ひたまひて家に在しますときに、独苑の中に遊びたまふ。時に關雞国造、傍の徑より行く。馬に乗りて籬に莅みて、皇后に謂りて、嘲りて曰く……」と記されているからである。

これによると、「母」すなわち百師木伊呂弁の家は關雞国造の通路の途中にあつたと推測されるので、百師木の師木は大和の磯城を指している公算が低くない。

それにしても田井中比売のいる河内の志紀郡田井郷と、その母・姉が居住する大和の磯城および十市郡忍坂郷とが泊瀬川・大和川によつて連結されていることは留意してよいと思う。

これまで述べたように、田井中比売自身も曾祖父と父も古大和川の近くに居住しているので、彼らは川とのつながりが深い家系であつたと推察される。ということは、この家系は古大和川や、また他の河川の首長や民を支配してきた公算が大きいのではあるまいか。それゆえに代々古大和川の近くに居住したのであろう。

つまり田井中比売とその家系が河川の民とその長を支配していたがゆえに、田井中比売のために川部を設定したのである。それが「田井中比売の御名代として、河部を定めたまひき」という「古事記」の一句の意味であると考ええる。

田井中比売の名代が川部と呼ばれたもう一つの理由は、彼女の宮殿の厨・家政機関に奉仕する人々や経済基盤の大部分が河川の民とその長によつて占められていたからではあるまいか。というのは、次章に述べるごとく、田井中比売の姉忍坂大中姫の忍坂宮の厨に仕えていた穴人部や刑部の元本となつた人々も、もとは山野に生活する猪養の民であつたからである。

### 三 川部と穴人部・刑部の共通性―山野河川の民―

穴人部の起源伝承は、『日本書紀』雄略天皇二十年十月条に載せられている。それによると、雄略天皇が穴人部の設置を欲していることを知つた母後の忍坂大中姫は、彼女の厨に仕えていた「厨人」の菟田御戸部と真籙田高天の二人を穴人部として献上した。この二人の名前は、忍坂大中姫に仕えていた厨人つまり穴人部の実態が入れ墨をした猪養であることを表わしている<sup>7</sup>。

厨人の菟田御戸部という名は、大和の宇陀の水戸部<sup>みとべ</sup>のことで、水戸部とは水戸すなわち溪流が盆地・平地に流れ出る水場において狩猟の獲物や飼育した猪などを洗浄・解体する人々のことであろう。具体的には宇陀の山林原野に生活する猪養の民であると思う。

真鋒田高天という名は「目割田の鷹目<sup>たかめ</sup>」のことで、目割とは鰐<sup>わ</sup>くこと、つまり目尻や目のまわりに入れ墨する意味である。そして真鋒田（目割田）という名について考えるのに参考になるのが、左記の『播磨国風土記』託賀郡目前田<sup>めさへだ</sup>の地名起源伝承である。

目前田は、天皇の獨犬<sup>ひとりいぬ</sup>、猪に目を打ち害<sup>わざ</sup>かれき。故、目割<sup>めさへ</sup>といふ。

真鋒田高天の高天は、「鷹のような鋭い目」という意味で、これも目の周りに入れ墨していることを名前にしたと思われる。入れ墨といえば、猪養や鳥養部・馬養部・阿曇部・久米部には鰐<sup>わ</sup>の習俗があった。入れ墨をしていた真鋒田高天も宇陀地方の猪養であろう。それは、真鋒田高天が鳥獣の肉を料理する穴人部に設定されたことから推定できる。

菟田御戸部・真鋒田高天は大和の宇陀の山野に生活していた猪養の長であり、忍坂大中姫の忍坂宮の厨には入れ墨をした宇陀地方の猪養の長や民が多数奉仕していた。そして彼らの一部が、忍坂大中姫によって穴人部に設定されたのである。

また、彼ら猪養の大部分は忍坂大中姫の名代の刑部（オシサカベ、オサカベ）に設定された。刑部は通説では刑罰に従事していたといわれるが、刑部が刑罰に関与した明証は一切ない。それでは刑部とは何かというと、入れ墨をした猪養のことである。

オシサカベが刑罰とは一切関係ないにもかかわらず刑部と表記される理由は、刑という漢字には入れ墨の意味があるからであり、オシサカベの元本となった猪養の民が入れ墨をしていたからである。ただし、諸国の刑部がすべて猪養であるとはかぎらない。このことは旧稿に詳述した<sup>8</sup>。

広大な宇陀の山野を背後に有する忍坂大中姫の宮殿の厨に宇陀の猪養の長たちが奉仕しており、忍坂大中姫支配下の猪養の民を元本にして穴人部と刑部が設定されたことから類推すると、その同母妹の田井中比売の厨にも河川の民が奉仕していた公算は小さくない。そしてその河川の民を元本にして川部という名代が設定されたと推測される。

思うに、忍坂大中姫領有の山林の民（猪養）や田井中比売所有の河川の民は、父母・祖父（応神天皇）や曾祖父（河派仲彦）から相続したものであろう。そうだとすると、応神天皇による海部・山部の設定の伝承は単なる伝承ではなくて、史実が含まれている可能性が高まってくる。

応神天皇の海部・山部の設定は、神武天皇に始まる国家建設の事業が応神天皇の代に完成して、天皇の支配は山の奥、海の底まで貫徹するにいたったということを主張するために作られたもので、『古事記』中巻の王権発達物語の最後を飾るための創作にすぎないと理解することもできる。

しかし、忍坂大中姫の山林の民（猪養）と田井中比売の河川の民が、彼女たちの祖父応神天皇や曾祖父河派仲彦がもとと領有していた人民であったとすれば、四世紀の内外征服戦争によって一般の

平地の農耕民とは別に猪養などを含む山野河海の民・渡来人が応神天皇や河派仲彦の領有民・兵士として集積されていたことを推定できる。そのような事実をもとにして、応神天皇が「海部、山部、山守部、伊勢部を定めたまひき」（『古事記』）という伝承が作られたのではあるまいか。

応神天皇・河派仲彦の支配下の山野河海の民が若野毛二俣王・百師木伊呂弁に伝えられ、さらにその子の忍坂大中姫と田井中比売に受け継がれたのであろう。

#### 四 川部の分布

川、川部、川人、川人部を名乗る人名と川部郷・川人郷の分布は次ページのとおりである。ただ川部・川人・川人部の総領的伴造は記紀にも『新撰姓氏録』にも記されていないものの、それは川造ではあるまいか。

というのは、次ページに示したように天平五年（七三三）頃の「山背国愛宕郡計帳」によると、愛宕郡某郷に川造と川人・川部が共存しているので、川部の総領的伴造の氏姓は川造ではないかと思われる。近江国甲可郡・高嶋郡の川直は地方的伴造であらう。

川部等の分布には、二つの特徴が看取できる。一つは、大和政権の膝元の大和・河内には分布しないものの、大和に隣接する山背・伊勢や、大和から比較的に近い近江、丹波、但馬に多く分布しており、比較的に近い所・遠隔地は備中と肥前だけで分布が少なくないということである。いいかえれば、刑部のように全国的に広く分布しな

いのである。

もう一つは、川部の名にふさわしく河川の近くに分布していることである。川造・川人・川部の共存する山背国愛宕郡は鴨川が流れ、伊勢国河曲郡川部郷（三重県鈴鹿市）は伊勢湾に注ぐ鈴鹿川下流に面し、川直のいる近江国甲可郡は琵琶湖に流入する野洲川の中・上流にあたり、川直の分布する同国高嶋郡高嶋里（滋賀県高島郡安曇町）は琵琶湖に注ぐ安曇川下流の地で琵琶湖に面している。

安曇川は中小の河川であるが、明治二十七年に政府が行なった調査（『水産事項特別調査』）によると、アユの漁獲高が多いのである。また琵琶湖は湖沼漁業の漁獲高は国内随一であった。

丹波国桑田郡川人郷（京都府亀岡市保津一帯）は保津川に面し、川人・川人部の分布する但馬国気多郡は日本海に流入する円山川の中流域にあたり、川人部のいる備中国賀夜郡日羽郷（岡山県総社市日羽付近）は瀬戸内海に注ぐ高梁川（川部川ともいう）中流の北岸に位置する。このうち高梁川は、『水産事項特別調査』によると一万円以上の漁獲高のあった国内二十河川の一つに挙げられている。

前掲の但馬国気多郡の川人部広井は気多団の穀であり、私物を献じて公用を助けた功績によって外従五位下に叙された。彼の莫大な私財は、円山川での漁業によって蓄積されたのであらう。

川部の分布する肥前国松浦郡は壱岐水道に流れ込む小河川が多数あり、そのうち東松浦郡浜玉町の玉島川は『肥前国風土記』に神功皇后が「年魚」を釣って新羅親征の成否を占う誓約をしたという伝承が残されている。

川部のいる同国彼杵郡も『肥前国風土記』に「野築」という名の

国郡郷	姓名	備考・出典
山背・愛宕 々・々	川部牟酒亮 川人秋亮	同郡戸主川造石弓の戸口、天平五年頃の山背国愛宕郡計帳 出典は右に同じ
々・々	川造石弓ほか十五名	出典は右に同じ
伊勢・河曲・川部郷		和名類聚抄
近江・甲可	川直百嶋	甲可郡主帳・無位、勝宝三年弘福寺領近江国蔵部莊莊券
々・高嶋・高嶋里	川直吉麻呂	優婆塞、天平十七年優婆塞貢進文
々・々・々	川直鑑	川直吉麻呂の戸主、出典は右に同じ
陸奥	川部乙万呂	宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木簡
丹波・桑田・川人郷		和名類聚抄
但馬・気多	川人部広井	気多団殺。私物を進めて公用を助けた功により外従五位下に叙された。延暦四年二月 に高田臣を賜姓された。続日本紀
々・々か	川人稲刀自女ほか二名	兵庫県城崎郡日高町但馬国分寺出土木簡（日高町但馬国分寺跡は旧気多郡に属する）
備中・賀夜・日羽郷	川人部麻呂ほか一名	天平十一年備中国大税負死亡人帳
肥前・松浦	川部酒麻呂	柁師。天平勝宝四年、入唐使第四船の柁師となり、帰途の海上で船尾に発した火災に 手を焼かれても柁を把って持ち場を離れず火を消した。その功により当郡員外主帳に 補せられ、宝龜六年四月、外従五位下に叙された。続日本紀
々・彼杵・大村	川部祖次	佐賀県唐津市中原遺跡出土木簡

※注「延喜式」兵部式に越中国川人駅が見える（高山本・九条家本・内閣本）。しかし享保板本には川合駅とあり、同国礪波郡に川合郷があるので川合駅が正しいか。



土蜘蛛がいて「川岸の村に住」み、「美しき玉」を所有していると伝える。野梁とは築で鮎などを取ることに因む名前であり、その野築という土蜘蛛が川岸の村に住んでいるというのだから、これは築を仕掛けて漁をする河川の民の酋長にほかなるまい。

## 五 川部の職掌（一）——河川の幸・薬草貢進と馬匹の飼育——

川部の分布地が備中と肥前を除けば田井中比売の宮殿のある河内国志紀郡田井郷からさほど遠くなく、かつまたその国その郡の主要な河川や湖沼の近隣にあるということから、川部の職務を推測できる。それは、河川湖沼の魚類を捕獲して、新鮮なうちにあるいは加工して田井中比売のもとへ届けることであろう。川部はどのような魚類を貢上したのであろうか。

『延喜式』等の文献を渉猟して、淡水魚の漁獲対象とその需給状況・漁法を論じた洪沢敬三の「式内水産物需給試考（一）」、（二）」によると、コイ・フナ・サケ・アユ・アメノウオ・マス・ウグイ・スズキ・イシブシなどが淡水の漁獲対象として古典にあらわれ、そのうちサケ・マス・アユ・コイ・フナは主要な魚種であり、とりわけサケ・アユが重要であった<sup>10</sup>。

ちなみに縄文時代の貝塚出土の淡水魚の魚骨は、サケ、マス、アメノウオ、ナマズ、ニゴイ、ウグイ、カマツカ、コイ、フナ、ヒガイ、オイカワ、ウナギ、カジカ、アカウオの十四種である<sup>11</sup>。

川部が捕獲・貢進したのもアユ・コイ・フナ・ウナギを中心とする魚類であろう。河川によつてはサケ・マスも獲れたかもしれない。

い。川鵜を使う漁もしたであろう。

川部は滋養の食物である鰻も貢進していたと思われる。というのは、田井中比売の夫の允恭天皇は持病・宿痾に苦しんでいたからである。

允恭即位前紀によると、允恭は「篤く病して、容止（举止のこと）不便」「久しく篤き疾に離りて、歩行くこと能はず」と伝えられている。そして新羅の「医」（允恭三年紀）、また「薬の方を深く知」る「新良」の「大使」（允恭記）の治療によつて允恭の宿痾が平癒したという。「記紀」が筆をそろえて允恭の持病を特記していること、「記」に新羅を「新良」と書く特別な表記が見られることから推すと、允恭が宿痾に苦しんでいたことは事実とみてよいであろう。

川部が献上する鰻は、「夏瘦に良しといふ物鰻取り食せ」「鰻を取ると川に流るな」（『万葉集』巻十六―三八五―三八五四）と大伴家持も歌っているように滋養強壯の食物であった。

允恭の後妃たちが、夫の病氣快復と健康増進を願つて、薬や栄養になる食物を八方手を尽くして探し求めて不思議ではない。田井中比売も配下の川部を使つて鰻を捕えて天皇に献上したはずである。

猪の肉などを貢進した穴人部も、本来は允恭の病氣平癒と健康のために皇后の忍坂大中姫によつて設定されたと推測される。

穴人部設定伝承は雄略天皇二年十月条に記載されているので、穴人部は雄略によつて設定されたかのように見える。しかし、穴人部は忍坂大中姫の「厨人」の菟田御戸部と真鋒田高天をもつて設定したのが始まりであるといわれ、忍坂大中姫と密接な関係に語られて

いる。一方、穴人部と雄略天皇とのつながりはさして緊密ではない。やはり穴人部は、忍坂大中姫が夫の健康のために允恭朝に設定したと見るのが妥当であろう。

また川部と穴人部・刑部は、河川や山野の民であるから、山野や河畔において薬草を採集して献上することにも従事したのではないかと推測される。夫の允恭天皇の宿病平癒と健康を願う后妃たちが、薬草確保に奔走、尽力するのは当然と考えられるからである。

さて、山背・伊勢・近江・丹波・但馬の川部・川人は、どのようなして贄の魚を河内国志紀郡田井郷の田井中比売のもとへ輸送したのであるうか。山背・近江・丹波は、河川によって田井郷とつながっている、川船で鴨川、瀬田川、宇治川、保津川や淀川をくだって草香江にいたり、そこから古大和川を少し溯れば河内の志紀郡田井郷に到着できる。

しかし、川船と河川利用の運搬だと、捕獲した魚類を新鮮なうちに届けるのに時間がかかり過ぎる。そこで思うに、志摩の海人が新鮮な海産物を「島の速贄」(「古事記」上巻)として大和へ急送したのと同じく馬を使ったのではあるまいか。「日本書紀」欽明天皇七年七月条にも「紀伊国の漁者の贄負せる草馬」が大和へ往来している記事が見えるので、海部が贄の運搬に馬を利用したことは間違いない。また、加工した贄を送るにしても馬を使えば大量に送れるので便利である。

そもそも川部の生業の場である川原や湖畔は、馬匹と関係が浅くなかった。清らかな水と新鮮な草のある川原・湖畔や川中島は天然の牧場となり、牛馬を飼育・放牧するのに適しているからである。

川部も川原や湖畔で馬を飼育していた可能性は低くない。

昌泰元年(八九八)十一月十一日の太政官符「(類聚三代格)巻十九 応禁制事」に

公私の牧野、多く河内国交野・茨田・讃良・洪河・若江、摂津国嶋上・嶋下・西成等の郡の河畔の地にあり。

と見え、淀川・古大和川の河畔の地が公私の牧場として使われていたことが知られる。そして、これら多くの牧場が川船の航行の妨げとなつていくという記述が続いている。

山背国愛宕郡を流れる鴨川の川原も馬の放牧場であつた。天平五年(七三三)頃の「山背国愛宕郡計帳」には川造・川人・川部とともに八坂馬養造鯖売の名がみえ、この八坂馬養造は鴨川東岸の愛宕郡八坂郷(京都市東山区大谷・吉水・円山・祇園・建仁寺辺り)に本拠を有する馬養であらう。八坂郷には「新撰姓氏録」(山城国諸蕃)に「狛国の人、之留川麻乃意利佐より出づる也」と称する八坂造がいるので、八坂馬養造は八坂造の同族と思われる。愛宕郡の川造・川人・川部も、鴨川の川原で馬を飼育していたはずである。

馬を飼育ことも川部の職掌の一つといつてよい。すると川部は、馬を使った陸上交通・陸運にも関与していたと推定される。

## 六 川部の職掌(二)——水運——

畿内の河川のうち最も重要な交通路となるのは、淀川と古大和川である。しかし、今のところこの二つの川の近隣に川部の分布は知られないものの、川部は貢納する贄を川船に積載して淀川・古大和

川を伝って河内国志紀郡田井郷へ運搬したはずであるから、彼らが河川の水運に従事したことは疑いない。

山背国愛宕郡の川造・川人・川部集団は、鴨川を下って淀川にいたった。近江国甲可郡の川直と同国高嶋郡の川直は琵琶湖から瀬田川・宇治川を経て淀川に出た。丹波国桑田郡川人郷の川人も保津川・桂川を下って淀川にいたる。そこから先はいずれも淀川を下り、淀川が流れ込む草香江という広い入江に出たのち、その草香江に注ぐ古大和川の本流（長瀬川）を十キロメートルほど溯れば田井中比売の宮殿のある河内国志紀郡田井郷に到着する。

また、遠隔地の備中の川人部と肥前の川部が河内の田井郷へ川の幸を貢上する場合は、海上輸送も必要となる。高梁川中流に位置する備中国賀夜郡日羽郷の川人部は、川船で高梁川を下って瀬戸内海に出たところで贅を海船に積みかえ、瀬戸内海を経て難波の天満砂洲と吹田砂洲の狭い水路か難波堀江を通じて草香江に入り、草香江に注ぐ古大和川を溯れば田井郷に着く。

なお、高梁川は岡山県三大河川の一つで、江戸時代までは川部（川辺）川とよばれていた（川部川という名称は川部と関係があるのではあるまいか）。昭和三年に伯備線が開通する以前は、上流は中国山地の新見市まで高瀬舟の舟運が栄え、下流の玉島港は瀬戸内海交通との接点として繁栄した<sup>12</sup>。

肥前国松浦郡・彼杵郡の川部は「松浦船」と呼ばれる船に贅を積載して出発し、壱岐水道・玄海灘・関門海峡・周防灘を航行して瀬戸内海に進み、そのあとは備中の川人部と同じルートで田井郷へ到ったと思われる。

肥前の川部が海上輸送も行なっていたことは、松浦郡の川部酒麻呂が遣唐使船の舵師となつて活躍したことからも推定できる。

『続日本紀』宝龜六年四月壬申条によると、川部酒麻呂は天平勝宝四年（七五二）に遣唐使第四船の舵師となり、帰途の海上で船尾から出火した。その炎は艫を覆つて飛び、人々はあわててなすところを知らなかった。そのとき酒麻呂は火に手を焼かれながらも舵を把つて持ち場を離れず、ついに火を消して人々を救った。その功績によつて位十階を授けられ、松浦郡員外主帳に補せられた。さらに宝龜六年四月、外従五位下を授けられた。

また、松浦郡の海人や川部は「松浦船」という船に乗って肥前と難波の堀江との間を往復していたらしい。松浦船は『万葉集』に詠まれている。

さ夜ふけて堀江漕ぐなる松浦船楫の音高し水脈早みかも

（巻七・一一四三）

松浦船さわぐ堀江の水脈早み楫取る間なく思ほゆるかも

（巻十二・三二七三）

この松浦船について谷川健一氏は、「肥前松浦半島付近で作られた外洋航行にも耐える堅牢な船」であると推定し、右の二首の歌は「難波と肥前松浦との交流を示」しているといわれる<sup>13</sup>。

なお、古大和川の水運に活躍した氏族として阿刀氏があり、これは亀井輝一郎氏の明らかにされたところである<sup>14</sup>。阿刀氏の本拠の河内国洪川郡跡部郷（大阪府八尾市跡部・洪川・植松付近）は古大和川主流（長瀬川）の左岸に位置し、田井中比売の本拠地の志紀郡田井郷の近く（北西約一二キロメートル）に所在している。

ともに古大和川の水運に携わった川部の領有者の居住地田井郷と阿刀氏の本拠地跡部郷とが、同じ古大和川の下流左岸に存在することは、単なる偶然であろうか。これは大胆な推測であるが、田井郷と跡部郷の辺りには古大和川の川の民が少なからず居住していたので、田井郷の川の民は川部に編成され、跡部郷の川の民は跡部に設定されたのかもしれない。ただし、現在のところ田井郷比定地の近辺に川部・川人部の分布は知られていない。

ところで、川部とその船はいつでも自由に淀川や古大和川を通行できたのであろうか。というのは、昌泰元年（八九九）頃の淀川・古大和川の河畔に公私の牧が多数設置されて航行の妨げになっていた、寛正三年（一四六二）の淀川には関所が三百八十も濫設されて河川交通を妨害すること甚だしかったからである。

しかし、川部が川船を使って田井中比売に対する贄貢納の職務を全うするためには、淀川・古大和川をはじめ瀬田川・鴨川・宇治川・保津川・桂川などの自由航行の保障が不可欠となる。

筆者は川部は河川の自由航行の権利を有し、それを保障されていたと考える。允恭天皇は川部を設定することによって、畿内の河川・湖沼つまり内陸水路の水上交通を掌握する意図を有していたのではあるまいか。内陸水路を抑えることは当時の国策ともいえる高句麗遠征の兵員・物資の輸送に必要であり、百舌鳥古墳群・古市古墳群・三島野古墳群の築造のための役夫・資材の運搬にも有益であると推測されるからである。

おわりに―山野河川の民・浮遊の民の掌握と定住―

川部・川人は、河川を生業の場とする人々とその長であり、河川の魚類を捕獲・献上したり川の水運や馬の飼育に従事していた。しかし、彼らは川部に設定される以前から定住生活を営んでいたのであらうか。

彼らの多くは、一年のうちの一定期間は川の幸を求めて河川の上流・中流・下流を上下したり、近隣の河川との間を移動したりする生活を営んでいたのではあるまいか。海部・山部に設定される以前の海人・山人が、移動・浮遊する一所不住の民という側面を有していたのと同じく、川部の前身の川の民も一所不住の民という一面をもっていたと推測される。

そのような川の民とその長が、允恭天皇の妃田井中比売の名代の川部・川人に設定され組織化されることによって、彼らは定住を強制ないし保障されたと推察される。伊勢国河曲郡川部郷や丹波国桑田郡川人郷は、定住生活を営むようになった川の民の集落を郷に編成したものであろう。また、それと同時に贄としての魚類貢進の義務を負わされ、河川の魚類捕獲と河川の自由航行の特権を認められたと考える。

允恭天皇朝には山野の民を穴人部や刑部に編成することも行われた。この穴人部と刑部については、第三章に述べたのであるが、ここでは穴人部・刑部に設定された山野の民も、川部に設定された河川の民と同じく、元々浮動する一面を有していたことについて記してみよう。

そこで繁雑であるが、いま一度旧稿において穴人部・刑部につい

て論じた私見の要旨を述べると、それは次の通りである。

宍人部の元本となった人々は大和の宇陀地方の山林に住む猪養の民であり、彼らを宍人部に編成した。刑部の元本となった人民も宇陀の猪養であった。彼らは顔面に入れ墨をしており、しかも刑字には入れ墨の意味があるのでオシサカベ（オサカベ）を刑部と表記した（これが刑部設置の第一段階）。そのあと刑部は全国各地に広く設定されたが、各地の刑部の多くは普通の農耕民であり、入れ墨もしておらず猪養でもなかった。しかし、刑部の元本となったのが入れ墨をした猪養であったので、各地に設定されたオシサカ部も刑部という表記が適用された（これが刑部設置の第二段階）。

右が旧稿の要旨であるが、いま改めて刑部と川部を一緒に並べて再考してみると、全国各地に広く設定された刑部の多くは普通の農耕民であるとした点は修正すべきであり、彼らのなかにも山野河川の民が少なからず含まれていたと思われる。

というのは、『和名類聚抄』によると、刑部郷は河内国若江郡刑部郷をはじめ摂津・伊勢・参河・遠江・駿河・上総・信濃・下野・丹波・因幡・備中・備後の十三ヶ国に十八郷も存在するが、これら刑部郷の多くは河川のそばか内陸・山間部に分布しているからである。この事実は、各地の刑部郷の刑部集団が普通の農耕民のほかに山野河川の民をかなり多く含んでいる可能性が高いことを推測させる。つまり、刑部の前身の人々も山野河川に生きる浮遊の民という一面を有していたのである。

刑部を右のように考えてよければ、允恭朝という時代は各地の山野河川の浮動的な人々までも刑部・宍人部・川部などに編成して

いった画期的な時代であったといえるのではなからうか。その結果、一所不住・浮動の側面を持っていた山野河川の民も定住を強制されて集落（刑部郷、川部郷の前身）を形成するようになり、その頃から集落の数が増加していったはずである。

しかも允恭天皇朝の五世紀中葉から集落の数が増加するという私見は、考古学上の知見とも矛盾しない。考古学者の川西宏幸氏は次のように言われている。

五世紀中・後葉における集落の増大は、関東だけにとどまらず、広範な地域に及んでいる可能性がある。もしそうだとすれば、移住による人口の集中というだけでは説明しがたい。そこで、ひとつの想像であるが、考古学上にほとんど痕跡をとどめていない浮動者が各地にいて、これが定着するに至った、とみてはどうであろうか<sup>15</sup>。

川西氏は、各地にいた浮動者が定住するようになったので、五世紀中・後葉に集落が増大したと推察されているわけであるが、川西氏の推測は妥当性が高いと思われる。

また筆者は、允恭天皇は大豪族・旧族を抑圧して大王の権勢を強固にするために意図的に中小豪族を伴造に編成・登用したのではないかと考えているが、その一環として中小豪族である山野河川の首長も刑部・宍人部・川部の伴造（刑部造・宍人部造・川部造・川部直）に登用されたのであろう。山野河川の中小豪族を部の伴造に編成・登用したことも允恭天皇朝の特色であるといつてよい。允恭が山野河川の首長とその配下の民を部に編成したもう一つの理由は、高句麗遠征に動員するためであらう。彼らは平地の農耕民より勇猛

であったからである。

なお、川部・穴人部・刑部に設定された人々は移動的一面を有する山野河川の民を多く含んでいたものの、彼らは非農耕民であったと言っているわけではない。彼らも水田耕作や焼畑を営んでいたと思われる。

また川部とともに川人・川人部も存在することは、直木孝次郎氏の明らかにされた人制<sup>16</sup>が允恭朝に形成されていた可能性を推測させる。この点でも允恭朝は注目にあたいする画期的な時代であったと考える。

注

1 共立女子短期大学文科「紀要」四一号

2 「古事記伝」三十九

3 渡里恒信氏は独自の見解を提示されている。若野毛二侯王の二俣は「磐余を流れ下る寺川と忍阪谷から流れ出る栗原川との合流点（桜井市川合）である」という。（継体天皇の祖先について）「日本古代の伝承と歴史」一〇四ページ（）

4 黛弘道「継体天皇の系譜についての再考」『律令国家成立史の研究』四八六ページ。

5 「角川日本地名大辞典・大阪府」三四五ページ、平凡社『日本歴史地名大系28・大阪府の地名Ⅱ』七八四ページ

6 「角川日本地名大辞典・大阪府」三五四ページ

7 宇陀御戸部・真鋒田高天という二人の名は、「宇田の御戸部の真鋒田と高天」というふうに区切ることも可能か（拙稿「刑部

と王賜銘鉄剣と隅田八幡人物画像鏡」『東アジアの古代文化』一三七号）

8 注1に同じ

9 竹内利美「河川と湖沼の漁法と伝承」『日本民俗文化大系5山民と海人』二八〇・二八一ページ

10 注9の二八七ページ

11 注9の二八五ページ

12 「国史大辞典9」「高梁川」項

13 谷川健一「古代海人の世界」一五四ページ

14 亀井輝一郎「大和川と物部氏」『日本書紀研究』第九冊

15 川西宏幸「ワカタケル期の歴史的意義」『同型鏡とワカタケル

―古墳時代国家論の再構築』三一―ページ

16 直木孝次郎「人制の研究」『日本古代国家の構造』

補注 古代の川部は、井上鋭夫氏の「山の民・川の民―日本中世の生活と信仰―」にとりあげられている中世・近世の河川の民とは直接関係ないであろう。